北海道医歌人会詠草

焼け跡世代

釧路　児玉　昌彦

たび重なる警報に倦み見上げればB29の巨体過ぎ行く
機銃掃射危うく逃れし目に残るグラマン操る若者の顔
我が家にも青酸カリの在りしこと思いいだせり沖縄の日に
急坂の階段さえも易々と登るジープに彼我の差歴然
軍神を送りし神社の境内でパンパン膝に抱くGI

※敗戦直後の世相や価値観の変化を表すため、当時使われていた呼称を用いております。

友の悲しみ

北広島　古屋雅三知

『妻死せり、五月初め…』と告ぐる友の電話向こうで絞り出す声
四年もの長患いの果て逝きぬ　低き嗚咽に言葉返せず
ありし日の友の惚気も懐かしき　一目惚れだな　旅愁の故さ
この先を汝は如何に生き行かむ妻の支えたる日常なりせば
Yという染色体の哀しさかX無くして生くる能わず

ホームにて

函館　水関　清

時刻表も　時計すらない駅ホーム　放送で知る列車接近
「石狩」と名のつく駅を見送りぬ　最後のひと駅「石狩沼田」
降りるのは一人だけでも　全席の「降ります」ランプ点く最終バス
真っ白も　めくれしものも並びをり　シャッター街にも季節は巡る
両側の銀杏並木に　秋の風　横断歩道を渡るギンナン

秋のひかり

士別　竹内　幹夫

鳥帰る空に残れるひとすぢの声を聴きつつ時を送りぬ
いのちとは風に応へて揺るるもの今ぞ静けき根に還りゆく
陽は傾き杜にしづけさ満ちにけり光の底に我を見いだす
夕ぐれの葉裏のいろに宿るもの絶ゆることなき祈りとぞ知る
澄みわたる空を仰ぎて思ひ出づ幼き日の手森にかざせし

中空知

滝川　村田　英俊

道端で今年も会えた野の花に「御苦労さん」と上から目線
再入所した高齢者のリュックには昔の施設だよりそのまま
過ぎ去ればなつかしき雪の砂川駅急な四十段の階段
先輩たちに罵倒され怒られて少年となりし日々　滝川で
離れたらたとえ近くに用あれどもう訪うことなき我が医院跡

アイリス

札幌　浜島　泉

花殻と枯葉を除く　アイリスの脇芽の蕾避けて切り取る
昼下がりハルゼミの鳴く散歩道　左は森に右は団地に
穏やかな日差しと霧に　わが庭のホタルブクロが蕾を付けし
マンションの庭にコウリンタンポポとブタナ競ひつ　夏至の朝は
親を超え米の祝ひを受くる齢　寿ぐ前に父は逝きけり